

言語はコミュニケーションの手段にすぎないか？

— フランス語から見えてくること —

東郷雄二

1. 理想言語計画の誤謬

世界中には7,000とも8,000とも言われる数の言語が存在する。これらはいつ誕生したかわからず、また数千年の歴史を経てこの地球上に存在する言語で、自然言語 (natural language) と呼ばれている。これにたいして人工言語 (artificial language) と言うとき、広義では Fortran や Basic などのコンピュータのプログラミング言語も含むことがあるが、狭義では誰かの手で作られた新しい言語を言う。ポーランドの眼科医 L.ザメンホフ (1859～1917) が作ったエスペラントがよく知られている。しかしエスペラントは最も成功し生き残った人工言語のひとつにすぎない。人工言語についての優れた研究書である Large (1985) によれば、この本が執筆された年までにおよそ800を超える人口言語計画があったという。それも資料がきちんと残っている計画についてであり、断片的な口伝まで含めると、いくつあるのか想像もつかない。

旧約聖書のバベルの塔の逸話によれば、地球上に多くの言語が存在し、異なる民族や異なる地方で言葉が通じないのは、人間が神の領域に迫ろうとした高慢の罰であるとされている。ただでさえ言語はたくさんあるのに、新しい言語を作ることですらに数を増やそうとするのはどうしてだろうか。人をして新言語を作らせる最も大きな動機は、自然言語の不完全さである。たとえば英語で dog の複数形は dogs なのに、child の複数形は childs ではなく children なのはなぜか。be 動詞の活用形が I am, you are, he is とばらばらなのはなぜか。英語が経てきた歴史の途上での、偶然を含むさまざまな変化の結果である。フランス語で「行く」を意味する動詞 aller の活用形に、je vais, tu vas, il vas, nous allons, ... のように va- 系統と all- 系統が混在しているのは、ラテン語の ambulare と vadere が入り交じってしまった結果である。自然言語はかくも不規則性と不純物に満ちている。「こんな言語を用いて私たちは自分の思考を正しく表現できるのか」という疑問が頭をもたげても不思議はない。この考え方は西欧世界に根強いもので、現代アメリカを代表する小説家ポール・オースターは小説『シティ・オブ・グラス』のなかで登場人物の一人に次のように語らせている。

「わしは今、新しい言語を考案中だ。(中略) われわれの言語はもはや世界に適合しなくなった。すべてが完全であったとき、われわれは言葉が事物を表現しようと信じていた。しかし、事物は少しずつ分解し、砕け、混沌に陥っていった。にもかかわらず、われわれの言葉は依然として同じだった。それは新しい現実に対応しきれなくなった。それ以来、われわれがそこに見て

いるものを口にしようとする、うまく説明できず、表現の対象そのものを歪めてしまう」。(角川文庫、山本楡美子・郷原宏訳)

これがまさに 17 世紀と 18 世紀のイギリスとフランスで起きたことである。両世紀にまたがり英仏海峡を挟んで両国で起きた思想運動を普遍言語運動 (universal language movement) という。この運動の歴史と展開については、Knowlson (1975)、Eco (1993)、Stillman (1995) などに詳しく書かれている。

問題は理想言語を作ろうと野心に燃えた人たちが、どのような言語を理想としたかである。たとえばカンタベリー司教 J.ウィルキンズが著書 *Real Character* (1668) で描いた理想言語は、百科事典的な万物の分類になっており、当時知られていたあらゆる動植物・鉱物・抽象概念などを系統的に分類し、それらに独自の記号を当てた驚くべきものである。またライプニッツが *De arte combinatoria* (1666) 「結合術」で考案したのは、単純概念を素数で、複合概念をその組み合わせで表す方法で、たとえば 2 は「動物」、3 は「理性を持つ」を意味し、「人間」は動物で理性を持つので $2 \times 3 = 6$ で表すというものであった。ウィルキンズは英語のアルファベットは表音文字で意味を表さず、概念に対応しないという点に大きな欠陥を見ていた。この点で彼らが理想としたのが中国語の漢字であったことは興味深い。漢字は表意文字であり、「鯨」「鱈」「鮭」など魚扁の文字は魚を表し、「杉」「松」「梅」など木扁の文字は樹木を表すというように、文字が概念の分類となっているところに正しく世界に適合している言語の性格を見たのである。これらの理想言語計画者たちが目標としたものを一言で言えば、「世界を歪めずに正確に映す鏡」としての言語であった。

しかし 21 世紀の今日言語学を研究する私たちは、この目標が原理的に実現不可能なものであるのみならず、そもそも前提がまちがっていることを知っている。言語は「世界を映す鏡」などではない。これを最も端的に示したのは現代言語学の父と称される F. de ソシュール (1857~1913) である。

「心理的にいうと、われわれの思想は、語によるその表現を無視するときは、無定形の不分明なかたまりにすぎない。記号の助けがなくては、われわれのは二つの観念を明瞭に、いつもおなじに区別できそうもないことは、哲学者も言語学者もつねに一致して認めてきた。思想は、それだけ取ってみると、星雲のようなものであって、そのなかでは必然的に区切られているものは一つもない。(中略) 言語はまた、一葉の紙片に比べることができる。思想は表であり、音は裏である。裏を分断せずに同時に表を分断することはできない。おなじく言語においても、音を思想から切り離すことも、思想を音から切り離すことも、できない」。(Saussure 1916)

ソシュールは、まず最初に事物・概念があり、言語とはそれにラベルを貼るように名前を付けたものにすぎないという考え方を「言語=名称目録観」として批判した。言語におい

て表現部（シニフィアン）である音と意味部（シニフィエ）である意味とは表裏一体のものである。言い換えれば、言語は世界を映す鏡などではなく、逆に言語によって意味が切り分けられているということである。17・18世紀の理想言語計画者たちはこの点を理解していなかった。

しかしこれは現代に生きる私たちについても言えることだろう。日本語の「犬」と英語の dog を並べて単語帳を作るとき、私たちは無意識のうちに事物にラベル貼りをしているのではないか。世界は同一であり、日本語と英語とでは単に貼られているラベルが異なるだけだと考えがちだ。「言語はコミュニケーションの手段である」と言うときにも、私たちは心のなかで同じことをしているのではないか。言葉は単なる乗り物にすぎず、その乗り物に乗せて運搬する意味は同一だと、暗黙のうちに見なしているからである。近年日本では特に英語教育の分野で、コミュニケーション能力を重視する教育が行われている。コミュニケーション能力が高まること自体はけっこうなことである。しかし、「言語はコミュニケーションの手段にすぎない」と考え主張するならば、それは大きな誤りである。

次節ではフランス語と英語の冠詞の用法に焦点を当てて、言語がどのように精妙に意味を切り取る能動的な働きをしているかを見てみたい。

2. 英語とフランス語の冠詞体系

フランス語はロマンス語のなかでも最も冠詞を発達させた言語で、一方の英語は冠詞の発達が途中で止まってしまった言語であるため、冠詞体系に大きなちがいがあある。英語の冠詞は次のような体系をなしている。∅記号はゼロを表し、無冠詞であることを示す。

		不定		定	
		単数	複数	単数	複数
可算		a	∅	the	
非可算		∅			

これにたいしてフランス語は次のような体系をなしている。文法で部分冠詞と呼ばれている du、de la は、非可算名詞用の不定冠詞なので、この表ではそうしてある。

		不定		定	
		単数	複数	単数	複数
可算	男性	un	des	le	les
	女性	une		la	
非可算	男性	du		le	
	女性	de la		la	

英語・フランス語ともに上の表の横軸は、修飾する名詞句の定・不定を表す談話機能を担い、縦軸は可算・非可算に関わる意味の切り分けを行なう認知機能を担う。本稿では冠詞の談話機能には触れず、もっぱら認知機能に焦点を当てる。

上の表でもわかるように、英語には非可算専用の冠詞がない。弱形の *some* を使うことはできるが、ふつうは無冠詞で済みます。このため次のような英仏の対比が生じる。

(1) a. I drink \emptyset wine.

b. Je bois *du* vin. 私はワインを飲みます

英語では不定冠詞の付く *a book* と付かない *wine* の区別を知る必要があるため、学習辞典の多くは *book* [C]、*wine* [U] のように記号を付しているものが多い。少しいねいな辞書では、*wine* [U] に「種類を問題にするときは [C]」と書かれているものもある。*French wines* のような例があるからである。

さて、名詞の可算・非可算の区別はどのような基準に基づいて決まるのだろうか。外国語教育の現場では、「水のような液体、ガスのような気体、砂のように粒が細かいものにははっきりした輪郭がなく、一つ二つと数えることができない。だから非可算名詞として扱われる。*love* のような抽象概念も同様である」と教えているだろう。この説明がまちがいだとは言わない。しかし学問的に見るならば、この根底には「可算・非可算の区別は、単語が表している物体の物理的性質によって決まる」という考え方が潜んでいる。これはまさしくソシュールが批判した「言語＝名称目録観」であり、「言語は世界を映す鏡である」とする思想そのものである。しかし、英語で非可算として扱われる単語がフランス語で非可算とは限らない。*hair* は英語で非可算だが、フランス語 *cheveu* は可算名詞である。それはなぜかという、言語によって「意味の切り分け」が異なるからである。そしてこの意味の切り分けに冠詞が深く関わっていることは、案外知られていないのである。

名詞の可算・非可算の区別が、表している物の粒々の大きさに決まるという説明は、次の引用が示すように広く行われている。

「米は *de la farine* (小麦粉) 並に、豆は *des frites* (フライド・ポテト) 並に受けとめられるので、可算、非可算の境界線はこのあたりにありそうです。しかし、お米とほぼ同じサイズのレンズ豆は *des lentilles* となります。米は集合体 (*du*)、豆類はパラパラ (*des*) と感じるせいでしょうか」。(一川 1996)

次節ではこの考え方ではうまく説明できない例を中心に取り上げて、いかにこの考え方がまちがっているかを示す。

3. 非可算名詞の可算化

もし言語が世界を映す鏡にすぎず、可算・非可算の区別が物の物理的性質によって決ま

るのならば、可算名詞は常に可算として、非可算名詞は常に非可算として用いられるはずである。文中での使われ方によって、物の粒々の大きさが変わることはないからである。しかし実際はそうではなく、名詞の可算性は流動的であり、そのことの中にかこそ言語が果たす「意味の切り分け」のダイナミズムが存在する。言語は世界を受動的に映しているのではなく、逆に言語が世界を能動的に切り分けているのである。

まず本来は非可算である名詞が可算的に用いられる例を見る。以下、特に断らないが英語の例の多くは石田 (2002) から借用する。a. は可算、b. は非可算の例である。

- (2) a. There is *space* for three cars in the garage.
b. Is there *a space* for the car in the firm's car park?

- (3) a. Il faut mettre *un peu d'espace* entre les lignes.
行間をもう少し空けなくてはいけない

- b. On a laissé *un espace vert* autour de la maison.
家の周囲に緑地が残された

「空間」には本来輪郭がなく均質であるため非可算だが、「車一台分の駐車区域」や「特定の用途の区域」と把握されると輪郭が生じて可算的に用いられる。(3) a. では冠詞でなく数量詞 *un peu* が付いているのでわかりにくいですが、*un peu* は非可算名詞にしか付かないので、(3) a. の *espace* は非可算用法である。

- (4) a. Do you have *time*?
b. She lived in Paris for *a time*.

- (5) a. Avez-vous *du temps*? 時間はありますか
b. La jeunesse n'a qu'*un temps*. 青春は一時期のことにすぎない

「時間」も同様で、本来輪郭を持たないが、「ある時間区分」「時期」という把握をされると可算的に使われるようになる。

- (6) a. He had been trying to make *conversation*.
b. I'd finally had *a conversation* with Max.

- (7) a. Il a eu *de la difficulté* à persuader son père.
彼は父親を説得するのに苦労した
b. Il a dû fermer le magasin à cause *des difficultés financières*.
彼は財務上のトラブルから店を閉めざるをえなかった

conversation に不定冠詞が付いて可算化されるのは、「1セッションの会話」と輪郭が限定されるためである。(7) a. で *de la difficulté* は「困難さ」という抽象概念だが、(7) b. の *des difficultés financières* は実際に遭遇した数々の金銭トラブルという具体的な出来事をさす。非可算名詞には原理的に複数形はないので、複数化されているということは可算化されているということを意味する。

非可算の抽象から可算の具体へという意味の変化は、もちろん英語でも見られるものだ

が、フランス語でははるかに広汎に観察され、それが意味の変化につながっているという点に注意が必要である。次は驚見 (1985)から引いた例で、見事な日本語訳も驚見による。

(8) a. J'ai reçu et baisé votre lettre, et lu vos tendresses avec des sentiments qui ne s'expliquent point. お手紙をいただき、口づけをいたしました。愛情のこもったお言葉の数々を読んだときの気持ちは、とうてい言い表すことができません。

b. Mon temps se passait en *indécisions*, en rencontres de gens pareils à des spectres.
あれこれ迷ったり、亡霊みたいな連中とつきあったりして暮らしていた。

la tendresse は抽象名詞で「優しさ」だが、複数の les tendresses は「愛情のこもった言葉(行為)」という具体的な意味になる。同じく *indécision* は「ためらい、不決断」だが、les *indécisions* は「あれこれ迷った実際の事例」である。単数でも具体例を意味することもあるが、一般的にフランス語には抽象名詞の複数形は具体的意味を表すという原則がある。このため次のような意味変化を生じる。

(9) a. la profondeur 深さ / les profondeurs 深海、深い所

b. la solitude 孤独 / les solitudes 人気(ひとけ)のない場所、人跡未踏の地

c. la pourriture 腐敗 / les pourritures 腐った物

d. la lenteur 遅さ / les lenteurs 遅れ

e. la célébrité 有名 / les célébrités 著名人

(9) では左側が非可算の抽象名詞で右側が可算である。これを見ても「複数とは単数がいくつ寄集まったものである」という単純な見方がまちがっていることがよくわかるだろう。a book がいくつ寄集まった (some) books は確かにそうだが、(9)では複数単なる単数の集合ではなく、非可算的概念領域から可算的概念領域への移行に伴って、意味が抽象から具体へとシフトしていることがわかる。

(10) a. *Iron* rusts easily.

b. He used *an iron* to press his shirts.

(11) a. La viande a été servie dans une assiette en *verre*.

肉料理はガラス製の皿で出された

b. Il a pris *un verre* de vin.

彼はグラス一杯のワインを取った

これは非可算が「材質」を、可算が「製品」を表す例である。日本語では「ガラス」「グラス」と、語彙を変えて表しているところがおもしろい。

ここまで見て来た例では、石田 (2002) が指摘しているように、本来はどこまでも広がっていてどこを取っても同じという均質な非可算的領域に有界性 (boundedness)を導入することによって可算化していると言える。ところが次の例では単なる有界性ではなく、メトニミー・リンクが用いられているという点において、さらに一歩進んだ意味の切り分けが行われていることを見てもよい。

(12) a. *Sony is an excellent company.*

b. *I bought a Sony.*

(13) a. *Toyota est le premier constructeur d'automobiles du Japon.*

トヨタは日本の自動車のトップメーカーである

b. *J'ai acheté une Toyota.*

私はトヨタ車を買った

a. は非可算ではなく固有名であるが、数えることができないという点において非可算と共通の性質を持つ。これにたいして b. ではソニーやトヨタの製品という意味になり、ここには「製造業者から製品へ」というメトニミー・リンクが働いている。メトニミーとは、「永田町」で国会を表し、「財布」で財力を表すように、関係の深い別の物によって本来の物を表す修辭をいう。

英語の名詞には性がないが、フランス語の名詞には男性・女性の区別があるので、興味深い事例が観察される。*une Toyota*「トヨタ車」には女性の冠詞が付いているが、これは *une (voiture de) Toyota* のように *voiture*「自動車」という女性名詞が隠れているためである。量産される工業製品の場合はこのようになる。では芸術作品の作者から作品へのメトニミーではどうなるだろうか。

(14) *J'ai acheté { un Picasso / un Laurencin }.*

私は {ピカソ / ローランサン} の作品を買った

ピカソは男性でローランサンは女流画家だが、冠詞はともに男性形の *un* だから、作者の性別に一致しているのではない。また『小学館ロベール仏和大辞典』では、*un Manet* という用例について、*un (tableau de) Manet*「マネの一枚の絵」という註釈が添えられており、不定冠詞は隠された名詞の *tableau* に一致するとされている。しかしこれはまちがいである。ロダンは彫刻家なので作品は *une statue*「彫像」で女性名詞になるはずだが、「ロダンの作品」というメトニミー表現は *un Rodin* で、冠詞は常に男性形である。つまりここでは冠詞が隠れた名詞に一致しているのではなく、作者から作品へのメトニミー・リンクが働くとき、性別のある作者から性別のない作品の領域へと移行していると見るべきである。

英語にも同じ現象があり、*This painting is a Rembrandt.* という表現ができるが、石田(2002)はこのメトニミー表現について次のように述べている。

「ただし『作者→作品』というメトニミーではあっても、固有名が完全に普通名詞化し不定冠詞をとることができるのは、絵画や彫刻といった狭義の芸術作品を、作者の名前をもって表現するようなケースに限られています。文学作品についての場合、(中略) 不定冠詞を伴う形で普通名詞化することは極めて稀なようです。」

そして文学作品の場合は、次のように無冠詞の方がふつうだとしている。

(15) *Shakespeare takes up five feet of Dale's bookshelves.*

おもしろいことに英語では難しいとされる文学作品のメトニミー表現は、フランス語では

広く用いられている。

(16) a. *J'ai lu un Balzac.* 私はバルザックの作品を読んだ

b. *Il y avait du Colette au concours.* 入学試験にコレットが出た

これはフランス語の方が英語よりも冠詞の体系が発達しており、冠詞の働きによる意味の切り出しが広範囲に用いられている結果だろう。(16) a. では不定冠詞が使われているが、b. では部分冠詞の男性形 *du* が付いている。ちなみにコレットは女流作家である。ここには、固有名(数えられない) → 作品(可算化) → 作品の一部(非可算化) という経路があり、まずメトニミー・リンクによって可算化し、さらに非可算化するという複雑な経路を通して生まれた表現である。

4. 可算名詞の非可算化

では次に逆に本来は可算名詞として用いられるものが非可算的に使われるケースを見てみよう。いちばんよく言及されるのは動物とその肉の場合である。

(17) a. *This farmer has twenty cows.*

b. *We had beef for dinner.*

(18) a. *Ce fermier possède vingt bœufs.* この農夫は牛を 20 頭持っている

b. *Nous avons mangé du bœuf au dîner.* 私たちは夕食にビーフを食べた

生きている動物は数えることができるが、肉になると非可算化する。英語では牛は *cow* / *ox* で牛肉は *beef* と異なる単語を使うが、これが 11 世紀に起きた *Norman Conquest* の結果フランス語が流入したためであることはよく知られている。フランス語では動物と肉を表すのは同じ単語で、意味のちがいを冠詞が担っている。それだけフランス語では冠詞が意味の切り分けに深く食い込んでいるのである。

(19) *un bœuf* 牛 / *du bœuf* 牛肉

un porc 豚 / *du porc* 豚肉

un mouton 羊 / *du mouton* マトン

ここで次の例を見てみよう。

(20) a. *He ate a boiled egg.*

b. *You have egg on your tie.*

(21) a. *We killed a chicken for dinner.*

b. *We had chicken for dinner.*

(20) a. は「ゆで卵」で、b. はネクタイに卵の黄身が付いているのである。(21)で a. は生きているニワトリで、b. は調理された鶏肉である。石田 (2002) ではこの a. と b. の関係を「全体」と「部分」として扱っている。確かにニワトリ丸ごと一羽と皿に盛られたチキンだから全体と部分ではある。しかしこれは生きている動物を表す可算的領域からその肉を表す非可算的領域へのシフトと見なすべきである。なるほどフランス語でも *un gâteau*

はホールケーキで、*du gâteau* はそれを切り分けたものを意味するので、全体と部分という関係は成立する。しかし全体と部分という関係は表面的表れにすぎず、可算から非可算へという領域のシフトが重要だと考えられる。このことは次の例を見ればよくわかる。

(22) a. I ate *chicken*.

b. I like *chicken*.

(23) a. J'ai mangé *du poulet*. 私はチキンを食べた

b. J'aime *le poulet*. 私はチキンが好きだ

英語では *eat* のような行為を表す動詞と *like* のように好悪を表す動詞の目的語で *chicken* はともに無冠詞になるので、差が出ない。しかしフランス語では前者には部分冠詞が、後者には定冠詞が付く。*du poulet* は確かに「部分」と言えるかもしれないが、*le poulet* は総称的に「鶏肉というもの」をさしているので「部分」ではない。非可算的で均質な領域を表すので定冠詞が付いているのである。

石田 (2002) は英語について非可算から可算への移行については詳しく論じているが、可算から非可算への移行については、上に挙げた動物と肉のケースと全体と部分についてしか言及していない。これは英語の冠詞の発達が途中で止まってしまったためである。フランス語はさらに冠詞を発達させたせいで、可算から非可算へという経路がはるかに活発に利用されている。以下では特にフランス語に焦点を当てて見て行くことにする。

まず可算が類 (*kind*) を、非可算がその具体的事例を表すケースである。

(24) a. Il y a *de la truite* dans cette rivière. この川には鱒がいる

c. Dans ce bois, on trouve *du lièvre, de la perdrix, du faisan*.

この森には野ウサギやヤマウズラやキジがいる

de la truite と部分冠詞が付いているが、川を魚の切り身が泳いでいるわけではない。ここでは *la truite* が生物学的な類 (*kind*) としてのマスを表しており、*de la truite* は類の具体的な表れとしての個体群を表しているのである。

作者から作品のメトニミーについては、上で少し触れた。次の例では *Mozart* (数える対象ではない) → *un Mozart* (作品) → *du Mozart* (作品の一部) という経路をたどっている。

(25) a. Il a joué *du Mozart*. 彼はモーツアルトを演奏した

b. Il y avait *du Colette* au concours. 試験にコレットが出た

次は物とそれを用いる活動を結ぶメトニミー・リンクが発動されるケースである。

(26) a. Il possède *une bicyclette française*. 彼はフランス製の自転車を持っている

b. Il aime faire *de la bicyclette*. 彼はサイクリングをするのが好きだ

(27) a. Il possède *un cheval*. 彼は馬を所有している

b. Il aime faire *du cheval*. 彼は乗馬が好きだ

この例を見ると、伝統文法で *du, de la* に部分冠詞という名前が付いているのが、いかに不適切かわかる。*de la bicyclette* が自転車の「部分」を表すとしたら、ハンドルだけとか車輪

だけになってしまうが、もちろんそうではない。「物」から「それをを用いる活動」というメトニミー・リンクが働いて、「サイクリング」を意味するのである。また「馬」について動物から肉へのメトニミー・リンクが発動すると *du cheval* は「馬肉」という意味になるので、一つの単語についてもメトニミー・リンクには複数の経路が存在することがわかる。

次は個体から性質へのメトニミー・リンクの例である。

(28) a. *Il y a du professeur en lui.* 彼は教師めいたところがある

b. *Il y a de la sainte en Denise.* ドニーズにはどこか聖女めいたところがある

この場合は冠詞は名詞の性に一致する。作者から作品へのメトニミーでは常に男性形の冠詞を取るのと対照的である。

次はさらに複雑なケースである。

(29) *Ça, c'est de la voiture !* これこそ車ってものだ

たとえばボルシェのような高性能の自動車を前にしての発話が考えられる。英語で *He is the man*. 「彼こそ男の中の男だ」のように、定冠詞で「男」というカテゴリーのプロトタイプの中心メンバーをさす用法があるが、これと同じように *la voiture* が「自動車」の中心メンバーをさし、部分冠詞の付いた *de la voiture* がその具体例を表すと考えられる。

5. 言語相対論 *linguistic relativism*

ここまで可算名詞が非可算的に用いられ、逆に非可算名詞が可算的に用いられるケースの検討を通じて、可算・非可算の区別が名詞がさす物の粒々の大きさ（物理的性質）によって決定されるわけではないことを明らかにしてきた。つまり世界の側にあらかじめ可算・非可算の区別があり、言語がそれを忠実に反映しているのではないのである。逆に世界に可算・非可算の切り分けを行なっているのは言語の方であり、しかもその境界線をメトニミー・リンクなどによって自由に行き来し、新たな意味を創出しているところに、言語のダイナミズムを見るべきだろう。

20 世紀の中期に支配的であった言語学における構造主義の時代には、言語の恣意性 (*arbitrariness*) が強調され、名詞の可算・非可算の区別には意味的根拠がないとされた。構造主義の泰斗 L. ブルームフィールドは、英語の *oats* 「オート麦」と *wheat* 「小麦」の例を引いて、粒の大きさはほぼ同じなのに *oats* は複数になる可算で *wheat* は非可算だから、可算・非可算の別は文法上の約束事にすぎないと論じた。次の F. パーマーの引用はそれを踏まえていて、このような考え方がいかに根強いかがわかる。

「文法的な区別は意味的な区別ではないということは、そのあいだに一对一の対応がないような例をあげればすぐにわかる。よく引かれる例は英語の *oats* と *wheat* である。 *oats* は複数なのにたいして、*wheat* は単数である。(中略) *foliage* と *leaves* も同様であり、英語の *hair* は単数だがフランス語の *cheveux* は複数である。このような区別は文法的なものであり、意味的なカ

テゴリーに直接対応しているわけではない」。(Palmer 1990)

しかし 20 世紀も後半になると、構造主義の時代に恣意性に大きく揺れた振り子の揺り戻しが起こり、可算・非可算のような文法的区別には意味的動機付けがあると考えた認知言語学 (cognitive linguistics) が台頭し、考え方が大きく変化した。言語は世界を忠実に映す鏡ではなく、逆に不定形な意味の世界を切り分ける働きをするという考え方は、言語が人間の一般的認知能力の発現の一形態だとする認知言語学の思想と整合する。

さて、このように意味の世界があらかじめあるのではなく、言語が意味の切り分けをするとき、すぐ頭に浮かぶのは、言語によって切り分けのやり方は異なるのだろうか、それともすべての言語は同じ切り分けをするのだろうかという疑問である。誰も知るとおり意味の切り分けは言語によって異なる。日本語で「稲」「米」「ご飯」と区別されるものは英語では rice 一語で片付けられる。すると英語を通して見える世界と日本語を通して見える世界は異なるのではないかという考え方が生じる。これを言語相対論 (linguistic relativism) といい、この思想を唱道した E. サピア (1884-1939) とその弟子の B.L. ウォーフ (1897-1941) の名を取ってサピア=ウォーフの仮説と呼ぶこともある。サピアは次のように述べている。

「言語は社会的現実に対する指針である。ふつう、言語というものは社会科学の研究者にとっては重要な意味をもつとは考えられない。しかし、それは社会の問題やできごとについてのわれわれのすべての思考を強固に条件づけているのである。人間は客観的な世界にだけ住んでいるのでもないし、またふつうの意味での社会的活動の世界にのみ住んでいるわけでもない。人間は自分たちの社会にとって表現の手段となっているある特定の言語に多く支配されているのである。基本的に言語を使うことなく現実に適応することが可能であると考えたり、言語は伝達とか反省の特定の問題を解くための偶然の手段にすぎないと思ったりするのは全くの幻想である。事実は『現実の世界』というものは、多くの程度にまで、その言語集団の習慣の上に無意識的に形づくられているのである。2つの言語が同一の社会的現実を表すと考えてよい位似ているということはあるにない。住みついている社会集団が違えば世界も異なった世界になるものであり、単に同じ世界に違った標識がつけられたものというのではないのである」。(Sapir 1929)

サピア=ウォーフの仮説がどの程度まで正しいかについては、いまだに議論が続いている。ごく最近出版されたばかりの本に今井 (2010) があるが、多くの心理実験に基づいて今井はサピア=ウォーフの仮説の述べていることは基本的に正しいと結論している。もしそうならば、英語話者に見えている世界と日本語話者に見えている世界はちがっており、当然フランス語話者に見えている世界もまた異なっているということになる。

6. 結論にかえて

本稿では「言語はコミュニケーションの手段にすぎないか」という問いを、英語とフランス語の名詞の可算性を手がかりとして考えてきた。「言語はコミュニケーションの手段である」という考え方の根底には、話し手にはまず伝えたい意味があり、言語はその意味を乗せて運ぶ乗り物だとする前提がある。そしてその伝えたい意味は言語とは独立に存在するものだという暗黙の前提が横たわっている。

しかし名詞の可算性の検討を通じて明らかになったのは、意味は言語と独立に存在するものではなく、それぞれの言語は独自の意味の切り取りを行なっているという事実である。だとするならば、新しい外国語を学ぶということは、既存の意味に新たなラベルを貼ることではない。それは新しく学ぶ外国語の世界に頭の先までどっぷりと漬かって、その外国語独自の意味の切り取り方を学ぶということであり、その外国語という鏡に映る世界の見え方を学ぶということである。次の Gleason (1965) の例は、世界の見方が異なるといかに意味が変わるかをよく表している。

(30) Johnny is very choosy about his food. He will eat *book*, but he won't touch *shelf*.

book と *shelf* のふたつの名詞が無冠詞で使われているが、それは Johnny がシロアリだと想定されているからである。シロアリにとって本は読む対象ではなく、食べ物と把握される。本棚も同様である。*book* と *shelf* は食べ物と捉えられているので、非可算名詞になり無冠詞になっているのである。

世界中には7,000とも8,000とも言われる数の言語が存在する。言語の数だけ世界の異なる見方がある。これが尊重すべき豊かさであることは言うまでもない。

【参考文献】

Eco, Umberto, *La ricerca della lingua perfetta nella cultura europea*, Laterza, 1993 (邦訳ウンベルト・エーコ『完全言語の探求』平凡社、1995) .

Gleason, Henry, A., *Linguistics and English Grammar*, Holt, Rinehart and Winston, 1965.

Knowlson, James, *Universal Language Schemas in England and France 1600-1800*, University of Tronto Press, 1975 (邦訳ジェイムズ・ノウルソン『英仏普遍言語計画』工作社、1993) .

Large, Andrew, *The Artificial Language Movement*, Basil Blackwell, 1985.

Palmer, Frank, *Grammar*, Penguin Books, 1990.

Sapir, Edward, "The Status of Linguistics as a Science", *Language* 5, 1929

Saussure, Ferdinand de, *Cours de linguistique générale*, Payot, 1916 (邦訳『一般言語学講義』岩波書店、1940、改訳 1972) .

Stillman, Robert E., *The New Philosophy and Universal Languages in Seventeenth-Century England*, Bucknell University Press, 1995.

石田秀雄『わかりやすい英語冠詞講義』大修館書店、2002.

一川周史『新・冠詞抜きでフランス語はわからない』駿河台出版社、1996.

今井むつみ『ことばと思考』岩波新書、2010.

鷺見洋一『翻訳仏文法』日本翻訳家養成センター、1985（ちくま学芸文庫に収録）

【関連図書】

織田稔『英語冠詞の世界 英語の「もの」の見方と示し方』研究社、2002

参考文献に挙げた石田（2002）と並んで、本書は英語の冠詞の機微をていねいに案内してくれる良書である。

ジュリア・ペン『言語の相対性について』大修館書店、1980

本文でも触れた言語相対論を概観した本で、問題のありかがよくわかる。

丸山圭三郎『ソシユールの思想』岩波書店、1981

日本はソシユールをいち早く翻訳した国であり、ソシユール研究が盛んである。本書はソシユール研究の第一人者による研究書。

マリナ・ヤグェーロ『言語の夢想者』工作舎、1990

理想言語・人工言語の系譜について豊富な資料を示しながら書かれていて、おもしろく読める。

ロイ・ハリス、タルボット・J・テイラー『言語論のランドマーク』大修館書店、1997

副題に「ソクラテスからソシユールまで」とあるように、西欧思想において言語がいかに問題とされてきたかを解説した良書。